

# 槐

平成 15 年 4 月号



PDF 制作

俳誌の salon

# 槐の幟

高橋将夫

怒るでもなく白長須鯨かな  
須弥山に槐の幟の立ちにけり  
葱の香の中の懐奘と唯円と  
イカロスの翼や冬の銀河へと

橙のこのやはらかき皮の裏

円錐に冷たき砂の盛られあり

弓なりのまま凍ててをる象の牙

ながいこと待たされてこの据り鯛

ドーパミン狐火いよよ増えてきて

快樂けらくより湧いてきたりし冬の雲

あやふさの冬の林檎をもぎにけり

室 戸

松下八重美

春雪や軍鶏の鶏冠の真くれなゐ  
減り張りをつけて読みけり鳥曇  
あかときのは峠越しをり春の風  
糠雨の降る杉山の花通草  
黒潮の色濃くなりし桃の花  
六月や汀を馬の駆けゐたる  
一軒の駄菓子屋のある薄暑かな  
螢狩呼ぶ声闇に消えゆけり  
石垣に湿りありけり鴨足草  
真昼間の鶏鳴きにけり夏座敷

特別作品

川のぼる鮎に夕日の斜なり  
くさび打つ音のありけり秋しぐれ  
日の中の石榴三つに裂けてをり  
大年の正午を指せる花時計  
凍風の海に抜けたる室戸かな  
松葉蟹手足ゆつくり動きをり  
みぞれ降るたか女の墓の前に佇つ  
囲炉裏の火はぜゐて人の寝返りぬ  
錦木の枝八方に瀬音かな  
藪柑子に木洩れ日のあり神近し

# 槐安集

市場基巳

全景がなくなる柿を撈ぎとれば  
冬となるしじまの暗さ川底に  
毒なきはむしろさみしや冬の蛇  
沍空のきこゆるものを一人きく  
冬うぐひすその日の雨も聴くべかり

水野恒彦

本流に向く松の幹冬深し  
ひとごゑの通り過ぎたる霜柱  
たとふれば刻の追ひくる炭の音  
水涸れて午後は日当る巖なる  
狐火やくれなぬいろに杉の髓

石脇みはる



囁む音の口にこもりし古女かな  
初夢は星空を飛ぶおのれなり  
梅三分動物園のマントヒヒ  
大寒の熊野権現詣かな  
ニタ本の榎の木谷霞みをる

木下野生

寒泳を見てをりくはへ煙草にて  
雲映りゐて寒泳のあとの川  
表より裏までの土間根深汁  
寒卵とにかく割つてからのこと  
冬の日や玩具がひとりでにうごき

竹内悦子

柿の木に鶇来てをる二日かな  
新しき牛王札なり小豆粥  
水甕の月薄氷となりみたり  
風呂敷は唐草模様涅槃西風  
啓蟄や空のどこかに昼の星

延広禎一

眉飛んで鷹羽となりし夢始  
亀石や千本ちもと分葱の摘まれをる  
よき照りにごまめ妙らるる空也ノ忌  
首廻す梟星座早見盤  
折鶴に息吹き込みしひめはじめ

中島陽華

くりからもんもん背鱗なり春の雪  
女正月寿曾我の砌かな  
風呂釜を換え二ん月の天王山  
風止んでをり大根に辿り着き  
逆立ちや海霧の黄金色なして

栗栖恵通子

寒昴肋に隙間ありにけり  
カリヨンの乱れなりけり春霞  
打ちそこねたる六波羅の土竜かな  
白鳥の闇に唐紙ひらきをり  
三寒の鏡の部屋を通りけり

# 槐市集

植松美根子

数え日や齒科の階段のぼりつめ  
筆庄のたしかになりし大福茶  
鳥唄をくりかへしをり春待月  
初雀つぼみふくらむ枝に來し  
群はなれ一羽の鴨の川となり

宇田喜美栄

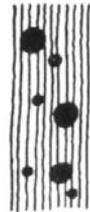
初風や近江神宮より望む  
賑ひをゆき山門の淑氣かな  
夫とゐて鉄瓶たぎる二日かな  
風花や仁徳陵のお濠端  
ひんがしに沈丁の闇ありにけり

岩月優美子

鳥声の澄みし虚空や弓始  
石切りの山に響みて鳥総松  
大寒の馬に跨がる背筋かな  
いつからか人住まぬ家水仙花  
信楽のたぬき大小日脚伸ぶ

大島翠木

白木蓮の冬芽に雨の至りけり  
厳冬に千手の影の泌み亘る  
雪晴の格天井の白き象  
ナルキソス海しばらくは吹雪けり  
向ふにも神渡り見えてしらかんば



# 槐集

高橋将夫選

地下道や春着の人と眠る人

大阪

加藤 みき

樑に青の風韻エトスのありにける

奈良

瀬川 公馨

お山焼もろもろ卵爆ぜにける

年の夜煮豆一辺倒につき

星雲や渦を巻きたる蝌蚪の腹

草枯の土に応へのありにけり

戸を開けて入れたる寒の大気かな

年の瀬や生後三週間の髭

流水や殻なき貝の遊泳す

冬の鷺ゆつくり松に移りけり

新巻の噛みたる塩の桃いろ

枚方

雨村 敏子

年頭の鴉のつよき羽音なる

香川

黒田 咲子

にこにこと慈姑を箱に詰めてをる

初風や白き鼻緒できてゐたる

山桃の洞に入りたる春霞

寒せうびん翔んで松脂一滴す

庖丁の鬆すにあたりけり丸大根

月面をゆくがごときにアノラック

蜜臘を溶かしてゐたり寒卵

猫殿の恋のきざしの火花髭

霜柱ふみて円の出を待つ間かな

谷村 幸子

春曉の浜に珊瑚のかけら満ち

枚方

谷口佳世子

如意ヶ岳に雪つもりたり七味買ふ

あをあをと寒鰯の背のゆたかなる

山かげの氷柱の長し神の猿

立春の牛脂を溶かすフライパン

人の日の釈迦の足裏を拝しけり

弁当のひとくちこんにやく春の海

坂のあるこの町が好き寒椿

春の闇砂の流るる音のして

# 銀河往来

## 高橋将夫

### ―創刊一五〇号へのカウントダウン―

○新生「槐」は2年目に入り、この7月には創刊12周年を迎える。9月は故省二先生の3回忌にあたり、11月23日(土)〜24日(日)には「槐」全国大会(香川句会幹事)が予定されている。

ところで、「槐」が創刊一〇〇号を祝ったのは、平成11年10月の8周年記念大会(守口プリンスホテル)の折であった。あれからもう4年になるうとしている。そう、すでにご存知の通り12月号で「槐」は創刊一五〇号に到達する。創刊一五〇号の祝賀会は香川でということ、少し気が早いようだが、市場基日会長をはじめ香川句会の方々に、よろしくお願い申し上げておきたい。ちなみに、香川での大会開催は、平成7年9月の4周年記念大会以来8年ぶりのこと。

○「槐」の俳句は百人百様である。「槐」の句は明暗、陰陽、伝統前衛、主観、客観、抒情、写生…全てを包含し、各人の、一句一句もまた、全てを内包する。その上で、なお、それらの句は、一点に収束するつまり、具象化されたそれぞれの作品は本質、真理、存在といったものに迫るなにかを共有しているということである、その本質、真理、存在といった、点に収斂するのである。それは作者や読者が意識しているかいないかの如何を問わない。

故省二先生によれば、一即一切、一切即一。一度、西田哲学における「絶対矛盾的自己同一」や弁証法的観点から「俳句における、一切の融合」に触れてみたいと思っている。

流水や殻なき貝の遊泳す 加藤 みき

流水の海を貝殻のない貝が遊泳しているという。一見、神秘の世界。貝に貝殻は予定調和。クリオネは巻貝ハの一種だが貝殻を持たない。まさに造化の不思議。

新巻の噛みたる塩の桃いろに 雨村 敏子  
塩鮭の塩が桃色になって見えたという即物的な描写の中に、生きる厳しさと躍動がさりげなくおさまっている。

霜柱ふみて日の出を待つ間かな 谷付 幸子  
朝霜の中で日の出を待つ作者。「霜柱ふみて」、「日の出を待つ」に作者の精神の風景が具現されているよう。

楳に青の風韻エトスのありにける 瀬川 公馨  
交譲葉に青のおもむきを見るあたりが、作者の画家たる由縁。エトスと読ませて、古典と現代が融合。

年頭の鴉のつよき羽音なる 黒田 咲子  
作者には「カラスの気骨」を俳諧風に詠んだ作品がある。今回は、年頭にあたり、其正面から気骨なるものを詠んでいる。

春暁の浜に珊瑚のかけら満ち 谷口佳世子  
春暁の浜が珊瑚で満ちている、ロマンの世界。しかし、かけらが満ちるとなると、尋常でない気もしてくる。(以下略)